



安全ニュース【2025年9月号】

(株)スタンダード運輸

(株)茨運 スズ工電機(株)



液体を積んだ車は横転しやすい



石油タンクローリーなど液体を運ぶトレーラーのドライバーはよく心得ていると思いますが、液体には「共振」という現象があって、カーブの連続等では左右にハンドルを切った際に、液体が動いて力での曲がる方向と反対に振返す力が働くのです。



この共振はカーブ等で車を外に押し出す遠心力を増幅することがあります。液体が容器一杯に隙間なく入っているときより、満タンではなく上部に隙間がある際に、特に振動が大きくなるのです。このために液体を積んだトラックが曲がる際に横転する事故が発生することが多々あります。

大きな容器ではなく液体が入った瓶などを多数運ぶ場合も、瓶の中の液体が共振するので同じ危険性があります。又ライトバンの荷台などに灯油のポリタンク等をたくさん積んでいるときも同様に、振動でハンドルを取られることがあるので、このような車の近くを走行する場合は注意することが必要となります。



車両マークがある車には近づかないのが基本



危
毒
高圧
ガス

ガソリン・灯油・軽油・重油等の引火性液体

塩素・ニトロベンゼン・発煙硫酸・黄リン等の毒物、劇薬

液化石油ガス・可燃性ガス

医薬外用
毒物

毒性が強く、特に取扱いに注意が必要な医薬品以外の物質（シアン化水素、水銀、弗化水素等）



毒物・劇薬マーク 引火性液体マーク

危険防止のため、やむを得ない場合を除き、このマークがついた車に幅寄せや割り込みを行った運転者は、道路交通法の規定により罰せられます。



スクールバス マーク

乗降中でハザードランプ点灯中のスクールバスの横を通過する際、運転者には、徐行して周囲の安全確認をすることが義務付けられています。



軽油は「危険物」です



軽油の特徴は以下の通りとなります。

●軽油の引火点が45℃以上とガソリンよりも高い（ガソリンの引火点はマイナス40℃）

●着火点については、ガソリンが「300℃」なのに対して、軽油は「250℃」と軽油のほうが低温である。

●霧状になると、常温でも引火の可能性が高まる。

●水より比重が軽く、水に溶けない。

●灯油と比較すると硫黄の含有量が多い。（淡い黄色又は淡い褐色）

●軽油の指定数量は1,000Lであり、これを超える分量の保管や取り扱いを行う場合には危険物取扱者の資格が必要となる。

●独特の臭いがある。

ガソリンや軽油の場合、消火のために水をかけたとしても、火がついたままの液体が拡散してしまう可能性があり、余計に危険度が増してしまいます。したがって、これらの物質の消火には泡や二酸化炭素などによる窒息消火が有効とされているのです。



バックモニターがあってもバック事故

当社でも多い逆突

バックモニターがあってもドライバーの注意が行き届かなければ、事故は防げません。

実際の事故原因を調べてみると、

- モニターを見る前にアクセルをすでに踏んでいて、見た時にはすでにぶつかっている。
- モニターでは電柱が遠くに見えたのだが、意外と近くてぶつてしまった。
- モニターに映っていない上部の底、軒などにぶつかった。
- モニターの死角となった車の横の場所からやってきた自転車に当ててしまった。
- 暗い倉庫の隅にモニターでははっきりと確認できなかった障害物があり、旋回してバックした際にぶつかった。

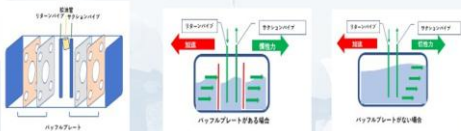


バックカメラに上部の底などは写らない

そのような場所や、見通しが悪い場所では、モニターだけに頼らないで、必ず「車から降りて」状況を先に自身の「目」でみることを徹底すること。降車して自身の目で確かめると、障害物は簡単に発見できます。「まあ大丈夫だろう」という甘い考えでバックした時に、事故が起こっていることを肝に銘じましょう。



トラックの燃料タンクの内部構造



トラックの燃料タンクの外見はただ四角い黒い箱に見えますが、実はトラックがあらゆる状況下でも問題なく走行できるように、様々な工夫がされているのです。

タンク内の燃料はトラックの動きによって、前後左右に波打つように動きます。燃料が少ないときにタンクの端に移動してしまうと、吸い込み口に燃料が無い状態となって、吸い上げられない可能性があります。なので、燃料タンク内部にはバッフルプレートという仕切りを設け、燃料がすくなくとも吸い込み口に燃料が集まるような構造をしています。バッフルプレートを付ける以外にも、底部がおわん型になっているような燃料タンクもあります。



一品一心

One Item, One Soul.

・駐車時の輪留め（2個）の徹底

・業務中のヘルメット着用

今一度、原点回帰